あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール 情報誌

THE PHOENIX HALL

世界と出会う♪ ♪小さな宇宙 20th Anniversary

Salon

Vol.98 2015年9月 秋号

ホール2Fホワイエ壁画 ポール・ギアマン作「野外のヴァイオリニスト」

CONTENTS

01 Prime Interview — 福井麻衣
03 Phoenix Presents — ジャパン・ストリング・クワルテット
05 Pick Up
07 Memories of 20 seasons — メモリアルインタビュー 與謝野 久
11 Essay de say — 自分を映す鏡、声と役 石橋栄実

あいおいニッセイ同和損保

2月26日「ハープ・アンリミテッド」に出演する大阪出身のハーピスト 福井麻衣さん

「ハープの限りない可能性を切り拓くことで、従来の固定イメージを覆したい」。そんな熱い思いが、「ハープ・アンリミテッド」というタイトルには漲っている。2005年に日本人として初めて、パリ国際ハープ・コンクールを制するなど、数々の登竜門で実績を重ね、パリを拠点に国際的な演奏活動を展開する大阪出身の俊英・福井麻衣が、ザ・フェニックスホールのティータイムコンサート・シリーズに登場。ドビュッシー「アラベスク第1番」など王道の名曲だけでなく、ワトキンズ「火の踊り」では打楽器のようなワイルドな表現、サクソフォンとの共演でのピアソラやドビュッシー。さらには、新鋭のエレクトリック・ハープを駆り、グルーヴ感あふれる「ホテル・カリフォルニア」まで聴かせるなど、多面的に魅力を掘り下げる。「“ハープの変身”を楽しんでほしい」と福井。このステージが、ハープの歴史を変える第一歩となるか。

（取材・文：寺西 肇／音楽ジャーナリスト）

――大阪のご出身だけに、ザ・フェニックスホールには、思い入れが大きいのでは。

はい。実家からも近いので、ステージは楽しみです。子供の頃、よく2階席から身を乗り出すようにして、聴いていたのを覚えています。特にアンコールの時、ステージ後ろの反響板が上がって、夜の街が見えるのが、とっても好きでしたね(笑)。それが今、ステージに自分が立って、お客様に聴いていただくのには、特別な感慨がありますね。

――今回は、大きく4つのブロックからなる、ユニークな構成ですね。

「ハープ・アンリミテッド」と言うタイトルには、まず「ハープが無限の可能性を持っていて、それを表現してゆきたい」と言うのと同時に、「自分自身も限界を作ることなく、チャレンジを続けてゆきたい」との気持ちも込めました。昨年2月にザ・フェニックスホールでリサイタルをさせていただいた折には、「古典作品から現代へ」という感じでプログラムを組んだんですが、今回のステージは4つの個性的なブロックで構成して、「ハープの変身」を楽しんでいただこうと考えました。

――最初のブロックは、「ハープで聴きたい曲」ばかりですね。

ええ。でも、実は全て、ハープのオリジナル曲ではないんです。バッハの場合、本来はヴァイオリンの作品ならば、滑らかなフレージングを、あるいは、

福井麻衣（ふくい・まい／ハープ）
大阪生まれ。パリ国立高等音楽院ハープ科・室内楽科を経て同音楽院修士課程ハープ科を審査員満場一致の最優秀と審査員特別賞を得て首席卒業。02年日本ハープ・コンクールアドバンス部門3位。05年パリ国際ハープ・コンクールで日本人初の優勝。12年イスラエル国際ハープ・コンクール3位。イスラエルフィルと共演。11年小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラの公演参加。14年初アルバム「ハープの宝石箱」が「レコード芸術」誌特選盤に選ばれた。平成26年度 咲くやこの花賞受賞。パリ在住。

印象覆す、エレキも挑戦

Mai Fukui

チェンバロの曲ならば、その煌びやかな音色を、どこまでハープで表現できるか。そして、次に置いたのは、グノーのオペラ《ファウスト》による幻想曲。このオペラは今年3月、パリのバスティーユ歌劇場での公演を実際に聴いて、歌とオーケストラ、そして場面を目と耳にしっかり焼き付けました。例えば、悪魔が「イッヒッヒッヒ」と笑うような場面もあるのですが、これも、どこまで不気味に再現できるか(笑)。どれも挑戦ですね。さらに、移り変わる旋律が流麗で、ハープの音色にも合っているドビュッシーの《アラベスク第1番》で、最初のブロックを締め括ります。

――次の“第2ブロック”は、打楽器のイメージですね。

ワトキンズの《火の踊り》は変拍子やヘミオラ、シンコペーション、爪でグリッサンドするパッセージなど、リズムが打楽器的です。続くデ・ファリャの「スペイン舞曲」は、オペラ中の原曲ではカスタネットが使われているので、そのイメージをどこまで再現できるか。そして、橋本玲子先生が昨年、私のために書いて下さった作品では、ウィンドチャイム(※1)とクロッタル(※2)、ふたつの打楽器をハープの左右に置いて、ハープと共に奏でます。打楽器は、ハープで出し切れない音を補完する意味合いもありますし、時にハープは打楽器の一部にも。特殊奏法も盛り込まれていて、砂漠と鳥の羽根のイメージを形作ってゆきます。

――後半で登場する「エレクトリック・ハープ」とは。

「エレキ・ギターの妹分」(笑)みたいな感じで、ギターと同じように、アンプやエフェクターを使い、立って演奏します。7年ほど前、デボラ・ヘンソン・コナント(※3)というハープ奏者が弾いているDVDを観て、まず彼女の聴衆を惹きつける力に魅力を感じて、私自身にも「幅広い層にアピールしたい」という思いがあるので、「いつかは…」と考えていました。今回は、コナントが作曲したエレキ・ハープのためのオリジナル曲《バロック・フラメンコ》を。そして、「典型的なエレキ・ギターの曲を」と《ホテル・カリフォルニア》を選びました。スライドやトレモロなどのギター特有のテクニックをどこまで再現して、お兄ちゃん(笑)に近づけるでしょうか。

――そして、サックスの井上麻子さんとの共演ですね。彼女は、パリ国立高等音楽院の先輩でもありますね。

実は、高校2年で受験を決めて、パリへ初めて見学に行った時に、偶然、声を掛けたのが麻子さんでした。初対面にもかかわらず、受験の要領やお手洗いの場所まで、優しく教えていただいて…(笑)。大らかで包容力のあるお人柄で、何より同じ関西出身で気も合うので、親しくさせていただいています。サックスとのデュオ自体が初めてですが、“大先輩”との共演は、ずっと念願でした。井上さんのサックスは、例えばドビュッシーだと、モネの絵画の色合いを感じさせる“印象派の音色”がして、フルートやホルンの音色がして来るような場面もあるんですよ。本当に楽しみです。

後半で使用するエレクトリックハープとともに。

――チャイコフスキーのオペラ《エフゲニー・オネーギン》の主題による幻想曲を、“締め”に置いた理由は。

これは、エカテリーナ・ワルター=キューネ(※4)の編曲です。私自身がこの曲を大好きだというのもありますが、オペラ自体は悲劇ですが、シーンの合間に美しいワルツが挟まります。この幻想曲も、優雅なワルツで明るく閉じられるので、楽しい雰囲気で帰っていただけると考えました。

――ところで、ハープとの出逢いは?

父の仕事の関係でスウェーデンに住んでいた7歳の時、学校のお友達の家に遊びに行ったら、金色のハープがどーんと置いてあって…「弾いてみたいなー」と思ったら一目惚れ(笑)。実は、この家のお母様がイェーテボリ交響楽団のハープ奏者で、彼女から手ほどきを受けました。その頃から、吉野直子さんが弾くCDが大好きで、何度も何度も聴いていました。スウェーデンの冬場の長い夜にも、その明るい音色に勇気づけられ、癒されていました。

――ハープの演奏にとって、最も大切なこととは。

ハープは指で直接弾くので、自分の感情が音に伝わってしまう楽器。自分の気持ちにざわつきがあれば、ハープからは悪い返事があるし、逆に、澄み渡っていれば、とても良い音で応えてくれる。常に、ハープが“教えてくれる”んです。

――東日本大震災の発生直後には、パリで開かれたチャリティー・コンサートに参加されていました。一音楽家として、どう社会と関わってゆこうとお考えですか。

あの時は、ごく自然に「何かやろう」と…。黛敏郎先生の「ROKUDAN」を弾いて、言葉にできない感慨を抱きました。音楽は、言葉を超える存在です。社会がどういう状況にあろうとも、音楽を聴いていただくことで、人を一瞬でも元気にしたり、希望をもっていただけたりできれば、と常に考えています。

――将来は、どういう音楽家になってゆきたいと思いますか。

ソロやアンサンブルは勿論ですが、他のジャンルとのコラボレートに挑戦して、ハープを知らないお客様にも広く聴いていただきたいですね。そして、いずれは後進を育てて、ハープ人口を増やしてゆければ。例えば、本当に夢なんですけど、学校にひとつハープが置いてあれば、実際に触れる機会が増えれば、演奏に取り組む子も出て来て…なんてことを漠然と考えています。

※1 長さの違う金属棒を大きさの順に並べて、糸で吊り下げた楽器。指などで揺らすと、涼しげな音色がする。
※2 アンティーク・シンバルとも。普通のシンバルよりも厚みがあり、音階がはっきりしている。
※3 Deborah Henson-Conant(1953〜)。米カリフォルニア出身のエレクトリック・ハープの第一人者。
※4 Ekaterina Walter-Kühne (1870〜1930)。ロシアの女流ハープ奏者

「ハープ・アンリミテッド 福井麻衣リサイタル」は、2016年2月26日(金)午後2時開演。入場料2,500円(指定席)、友の会2,250円。学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問合わせは同センター(電話06-6363-7999　土・日・祝を除く平日10時〜17時)。

[プログラム]
J・S・バッハ(ルニエ編):ト長調の小品〜プレリュード(パルティータ第5番から)
J・S・バッハ(グランジャニー編):アンダンテ(無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番より)
グノー(ツァーベル編):オペラ『ファウスト』の主題による幻想曲 作品12、ドビュッシー:アラベスク第1番
ワトキンズ:火の踊り、ファリャ(グランジャニー編):オペラ『はかなき人生』よりスペイン舞曲第1番
橋本玲子:アヴァロンシュ V〜ラ・プロヴィゼール(2014)、フェルダー/ヘンリー/フライ:ホテル・カリフォルニア
コナント:バロック・フラメンコ(J・J・ルソーの主題による)、ピアソラ:カフェ1930(『タンゴの歴史』より)
ファリャ:ホタ(『7つのスペイン民謡』より)、ドビュッシー:牧神の午後への前奏曲
チャイコフスキー:オペラ『エフゲニー・オネーギン』の主題による幻想曲　(予定)

9月25日(金)
10:00　受付開始
ザ・フェニックスホール
友の会優先予約

9月28日(月)
10:00　受付開始
イー・フェニックス
E-PHX優先予約

9月29日(火)
10:00
一般発売
インターネット予約、ご来店による
お申込みは**9月30日(水)10:00**から!

■PhoenixOSAQA2016

2016年3月18日(金)

14:00開演　指定席
一般¥4,000(友の会価格¥3,600)
学生¥1,000(限定数)

出演　久保陽子(第1ヴァイオリン)
久合田緑(第2ヴァイオリン)
菅沼準二(ヴィオラ)
岩崎洸(チェロ)

日本の「ベートーヴェン四重奏団」が奏でる、新旧ウィーン楽派。
ジャパン・ストリング・クワルテット

曲目　モーツァルト:弦楽四重奏曲第14番 ト長調 K387
ウェーベルン:5つの楽章 作品5　　ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 作品132　(予定)

日本を代表するヴェテランソリストと、アンサンブルの達人でつくるハイブリッドな弦楽四重奏団。ザ・フェニックスホールではこの10年、グループ創設の狙いだったベートーヴェンの作品演奏を重ねてきた。今回は、一時代前のモーツァルトを久々に取り上げるほか、世紀末の作曲家ヴェーベルンの小品にも挑戦。新旧ウィーン楽派を立体的に描く、音楽のタイムトラベル。合奏の真髄を若い世代に伝える教育・普及事業「Phoenix OSAQA」もお楽しみに。

久保陽子(くぼ・ようこ／第1ヴァイオリン)　3歳でヴァイオリンを始める。桐朋学園女子高等学校音楽科在学中に、ジャンヌ・イスナール、斎藤秀雄に師事。1962年チャイコフスキー国際コンクール第3位、パガニーニ国際ヴァイオリン・コンクール、ロン・ティボー国際コンクールではそれぞれ第2位に入賞後、スイスで巨匠ヨーゼフ・シゲティに師事。クルチ国際コンクール第1位。弘中孝と共に桐五重奏団を結成し、1974年民音室内楽コンクール入賞、斎藤秀雄賞受賞。現在は、無伴奏作品のリサイタルをはじめとするソロ活動、室内楽活動に力を注いでいる。

久合田緑(くごた・みどり／第2ヴァイオリン)　東京藝術大学在学中の1968年にJ・D・ロックフェラー3世財団などのスカラシップを得て渡米。ジュリアード音楽院、インディアナ大学に学ぶ。東儀祐二、鷲見三郎、服部豊子、イヴァン・ガラミアン、ジョセフ・ギンゴールド、フランコ・グッリ、アイザック・スターンに師事。1976年より日本での演奏活動を始め、日本テレマンアンサンブルのソリストとして活動した後、「久合田緑弦楽四重奏団」を1994年まで主宰。現在、大阪音楽大学教授、華頂女子高校音楽科芸術顧問・講師、京都市立芸術大学名誉教授。

菅沼準二(すがぬま・じゅんじ／ヴィオラ)　ヴァイオリンを岩崎洋三、ヴィオラを井上武雄に師事。東京藝術大学専攻科修了。巌本眞理弦楽四重奏団に長く在籍、ヴィオラ奏者としての力量を認められる。第7回毎日芸術賞、芸術祭賞、レコードアカデミー賞、第22回芸術選奨文部大臣賞、モービル音楽賞、その他受賞多数。1976年から90年までNHK交響楽団首席ヴィオラ奏者を務める。1989年第9回有馬賞受賞。現在、東京藝術大学名誉教授。オホーツク音楽祭in紋別のディレクター。NHK交響楽団客演首席奏者。

岩崎洸(いわさき・こう／チェロ)　11歳より斎藤秀雄に師事。桐朋学園高校を経て、アメリカのジュリアード音楽院に留学。レオナード・ローズ、ハーヴィー・シャピロ、パブロ・カザルスに学ぶ。ヤング・コンサート・アーティスト・オーディションをはじめとし、カサド、チャイコフスキーなどの国際コンクールに上位入賞。沖縄ムーン・ビーチ・ミュージックキャンプ&フェスティバルのディレクター、倉敷市文化振興財団音楽プロデューサーなどを務める。現在、桐朋学園大学特任教授、大阪音楽大学客員教授。

関連事業3/19(土)〜21(月)、「弦楽四重奏公開マスタークラス&レッスン聴講募集」「修了コンサート」については、2016年1月にSalonやホームページでご案内いたします。

ホール主催・協賛公演チケットのお申込み方法

06-6363-7999
土・日・祝日を除く平日の10:00〜17:00

■ザ・フェニックスホール友の会優先予約
・ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
・主催公演1公演につき会員お1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
・友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

■E-PHX(イー・フェニックス)優先予約
・E-PHX(イー・フェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
・事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話でのご登録はできません。

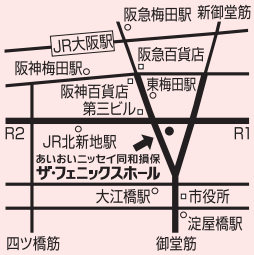
■一般発売
・一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

http://phoenixhall.jp/
チケットセンターのページからお申込みください

■インターネット予約 (主催公演のみ)
・ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
・チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますがお電話でお問合せください。
・ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
・学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
・チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールをお送りいたします。

直接のご来店による お申込み

・ザ・フェニックスホールチケットセンターはホール建物5階、エレベーターを降りて廊下右手です。



チケットお申込み後のお受け渡し方法
下記①または②のどちらかとなります。

①お申込み日から10日以内にザ・フェニックスホールチケットセンターへご来店ください。
営業時間は土・日・祝日を除く平日の10:00〜17:00です。
②先に郵便振込みをしていただき、入金確認後チケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座　00940-0-95351　　加入者名　ザ・フェニックスホール

弦楽四重奏の「意思決定」 ―中高年のための室内楽入門 ワークショップ

11月27日(金) 11:00開演 自由席　会場:あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

ティータイムコンサートシリーズ111 弦楽四重奏で聴くモーツァルト「レクイエム」―カルミナ弦楽四重奏団の公演につきまして、公演当日11月27日(金)午前11時より、ホールでワークショップ“弦楽四重奏の「意思決定」―中高年のための室内楽入門”を開催いたします。
弦楽四重奏団のメンバーは、演奏曲のさまざまな表現をどのように決めていくのか、そのプロセスの一端をお話と生演奏でご紹介し、室内楽の楽しみを知って頂く試みです。
ワークショップのチケット発売を開始いたします。ぜひ、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

■定員　先着100名様
(定員になり次第締め切ります。)

■入場料　1,000円(友の会割引なし)

※同日14時開演の公演、弦楽四重奏で聴くモーツァルト「レクイエム」―カルミナ四重奏団公演のチケットをお持ちの方は、無料。

■お申込み　ザ・フェニックスホールチケットセンター
TEL 06-6363-7999(土・日・祝日を除く平日10時～17時)

■お問い合わせ　自主企画公演グループ　TEL 06-6363-0211

9月29日(火)
10:00
発売開始

Phoenix OSAQA 2016

日本を代表する弦楽四重奏団ジャパン・ストリング・クァルテットが指導！

Open String Academy for Quartet Artists

弦楽四重奏を志す若者のための自由塾　来年3月開催

弦楽四重奏公開マスタークラス ＆ レッスン受講生、募集！

国内トップ級のアーティストでつくる実力派弦楽四重奏団「ジャパン・ストリング・クァルテット(JSQ)」を講師に迎え、審査で選ばれた若手の弦楽四重奏団を指導・育成、あわせて聴衆の育成も図る教育・啓発事業「Phoenix OSAQA(Open String Academy for Quartet Artists 弦楽四重奏を志す若者のための自由塾)」を本年度も2016年3月に行います。

主軸はJSQメンバーによる楽曲レッスン。指導にあたるJSQが一貫して取り組んできたベートーヴェンの弦楽四重奏曲を題材とし、楽曲の真髄や合奏の妙を伝授、指導の模様を聴衆に公開します。最終日には、「修了コンサート」も公開で行います。学生からプロの方まで、弦楽四重奏を学ぶ意欲に溢れた皆様の、この事業への参加を募ります。

■開催日程

2016年3月

18日(金) 14:00　ジャパン・ストリング・クァルテット演奏会

19日(土)・20日(日・祝)　弦楽四重奏公開マスタークラス

21日(月・振休)　受講生修了コンサート

■会場　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

■講師　ジャパン・ストリング・クァルテット
久保陽子(第1ヴァイオリン)　久合田緑(第2ヴァイオリン)
菅沼準二(ヴィオラ)　岩崎洸(チェロ)

■受講曲　L.v.ベートーヴェン作曲　弦楽四重奏曲より任意の1曲

■受講料　無料　[18日のジャパン・ストリング・クァルテット公演チケット(¥1,000)の購入が必要です]

■応募締切　12月4日(金)　応募資格など詳しくは、チラシかホームページ http://phoenixhall.jp/ をご覧下さい。

■お問合せ
PhoenixOSAQA2016事務局
TEL　06-6363-0211

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛公演のご案内

ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。
当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

協賛公演

主催　大阪アーティスト協会

大阪アーティスト協会30周年記念
テノール畑儀文《美しい日本のうた》歌います！あの歌この歌～思い出のメロディ

発売中

2015年11月6日(金) 14:00開演　指定席　一般前売・当日¥3,500（友の会価格¥3,150）

©EIJI SHINOHARA

出演　畑 儀文(テノール)、多田恵美子(ピアノ)

曲目　だれもいない海、瀬戸の花嫁、おふくろさん、襟裳岬、北の宿から、
中の島ブルース、神田川、ふれあい、喝采、シクラメンのかほり、
秋桜、氷雨、津軽海峡冬景色、恋人よ、昴、もしもピアノが弾けたなら、
少年時代、I LOVE YOU、糸、涙そうそう、また逢う日まで

関西を代表するテノール歌手畑儀文の「美しい日本のうた」シリーズ第2弾は、1970年から2000年までの歌謡曲の名曲をマイクなしピアノ伴奏のみのスタイルでしっとりと歌い上げます。

協賛公演

主催　ダウランド アンド カンパニイ

エマ・カークビーのクリスマス

発売中

2015年12月18日(金)　19:00開演　指定席　一般前売¥4,500（友の会価格¥4,050）
一般当日¥5,000（友の会価格¥4,500）　学生¥2,000　※友の会割引は1会員2枚まで。

出演　エマ・カークビー（ソプラノ）、
つのだたかし（リュート）、伊藤美恵（バロックハープ）

曲目
モンテヴェルディ：主をほめ讃えよ
ストロッツィ：ああマリア、なんと美しいお方
ヘンデル：主は羊飼いのようにその群れを養い（「メサイア」より）
バード：東方の輝く空から　ほか

古楽といえばこの歌声。エマ・カークビーの澄んだ暖かい歌声と、繊細なリュート、そしてバロックハープの豊かな響きにのせてルネサンスからバロックの聖歌、クリスマスの歌をお贈りします。あわただしい12月。こんな静かな音楽に、ひととき耳をすませてみてはいかが？200本の弦の響きに浮かぶ天上の歌声はなによりうれしいクリスマスの贈り物。

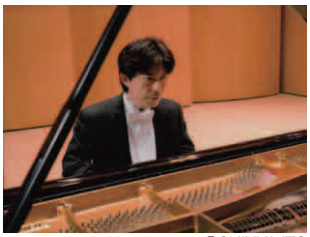
協賛公演

主催　オランジュの会

東 誠三　ピアノ リサイタル

発売中

2015年12月20日(日) 14:00開演　自由席
一般前売　¥4,000（友の会価格¥3,600）　一般当日¥4,500（友の会価格¥4,050）　※友の会割引は限定数、1会員2枚まで。


©SHINYA ITO

出演
東 誠三(ピアノ)

曲目　ショパン：3つの新しい練習曲、12の練習曲 作品10
「別れの曲」、「黒鍵」、「革命」ほか
ブラームス：ピアノソナタ 第2番 嬰ヘ短調 作品2
アルベニス：「イベリア」第4集より

～東 誠三の奏でる「三人の輝き」～
恒例となった東誠三の大阪リサイタルも今年で7回目を迎える。東京藝大の准教授やジュネーブ国際音楽コンクールの審査員などの活動を背景に、ピアノの持つ潜在力を極限まで引き出す演奏活動は、近年ますます評価が高まっている。一度東誠三の演奏を聴くと、ピアノのイメージを覆す。音の美しさと豊かな音楽性が聴衆の心を捉えて離さない。今回は得意のショパンと、昨年絶賛された色彩豊かなスペインもの、そしてブラームスでどのような新境地を見せるか楽しみである。

協賛公演

主催　ラ・プレイヤード

奈良ゆみ ソプラノ リサイタル
オリヴィエ・メシアンと松平頼則による愛の歌

発売中

2015年12月21日(月) 18:30開演　自由席
一般前売¥4,500　一般当日¥5,000　友の会会員前売・当日¥4,000　※友の会割引は1会員2枚まで。

出演　奈良ゆみ(ソプラノ)、ジェイ・ゴットリーブ(ピアノ)

曲目
松平頼則：逢ふことの(「三つのオルドルⅠ」より)、
朗詠風な幻想(七夕) ～ピアノソロ～、君ならで、川の瀬に 他（「古今集」より)、
エレジー(オリヴィエ・メシアンに捧ぐ)、ラ・グラース(7月の歌)
オリヴィエ・メシアン：ハラウィ ―愛と死の歌《全12曲》

互いに尊敬しあった松平とメシアン、二人の作曲家が心惹かれた声の持ち主奈良ゆみ。ロリオとカサドシュに学んだジェイ・ゴットリーブ。この二人の演奏による『ハラウィ』はドイツ・グラモフォン『メシアン全集』(2013)に収められている。いま2015年、その二人による日本公演が実現する。歌い手とピアニストとの深い信頼が、松平作品に宿る愛を、そしてメシアンの語る愛を、一期一会のかたちにする。<愛は、どんなふうに響くのだろう>

協賛公演

主催　フューチャーデザイン

ショパン×2 大阪公演

10/15(木)発売

2016年2月12日(金) 【昼の部】13:30開演　【夜の部】18:45開演　指定席　一般前売・当日¥4,000（友の会価格¥3,600）

©橋本千尋

出演
田代万里生(テノール、語り)、米津真浩(ピアノ)

曲目　ショパンの名曲を選りすぐって
ショパン：練習曲「革命」作品10-12
ワルツ「華麗なる大円舞曲」作品18
前奏曲「雨だれ」作品28-15
ポロネーズ「英雄」作品53
バラード第4番 作品52　ほか

世界で絶大な人気を誇る天才作曲家ショパンとは？ショパンの作品は世紀を超えて世界中の人々を魅了し感動を与え続けています。39年の人生で作曲した約230曲もの作品のうちピアノ曲は160曲余り。戦乱が続く19世紀ヨーロッパでショパンを取り巻いた人々、名曲の背後にあった人間ドラマにスポットをあてたコンサートです。田代万里生と米津真浩という気鋭の二人のアーティストが、現代のショパンとなって、新世代感覚で天才作曲家の愛の遍歴と名曲を辿ります。ご期待ください！！

来年1月23日（土）レクチャーコンサート「ピアノはいつピアノになったか？」補遺

「ドビュッシーとピアノの謎」に推理で迫る「音楽のシャーロック・ホームズ」

椎名亮輔さん 語る

今回「ドビュッシーとピアノの謎」と題して、同志社女子大学学芸学部音楽学科教授の椎名亮輔さんが、ドビュッシーが所有していたとされるピアノと同種類のピアノの演奏（野原みどりさん＝京都市立芸術大学音楽学部准教授）とともに、講演をなさいます。その演奏つき講演の聴きどころについて、プレスク・リヤン協会広報担当の萩野玲子さんがインタビューをしました。

『ピアノはいつピアノになったか？補遺「ドビュッシーとピアノの謎」』は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドヴァイザーの伊東信宏(大阪大学教授＝音楽学)企画・構成。2016年1月23日(土)午後4時開演。講師は、椎名亮輔(同志社女子大学教授)。ピアノは、野原みどり。[プログラム]ドビュッシー：ピアノのために、版画、喜びの島、映像第1集ほか（予定）。入場料3,000円(指定席)、友の会2,700円。学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問合わせは同センター(電話06-6363-7999 土・日・祝を除く平日10時～17時)。

萩野（以下H）「先生、今回は先生の昔からのご専門のドビュッシーについての講演ですね。」

椎名（以下S）「いや、昔からといっても、修士論文で彼の音楽への東洋の影響を論じて以来、きちんと研究をつづけてきたわけではないので……。その後は、もっと現代音楽、たとえば、萩野さんの属しておられるプレスク・リヤン協会の活動対象であるリュック・フェラーリ（＊）とかを研究していました。そのうえ、最近はスペイン音楽の方に興味が向いてしまっていで……。」

「今回の講演で使われるのが、ドイツのライプチヒのピアノ・メーカー、ブリュートナーのピアノです。それもやはり20世紀はじめのものが日本にあったんですね。それを堺のヤマモトコレクションの山本宣夫さんが修復してくださったんです。」

H「それはドビュッシーが使っていたピアノと同じものなのですか。」

S「そうなんです、というよりも、もっとすごいのは、ドビュッシーは当時めずらしい（今もめずらしいですが）アリコートという高音部の響きを増加するための装置、これは従来の弦の上にそれ自体は叩かれない共鳴弦をはるというものですが、これをつけた楽器をもっていたんですね。そして、そのアリコートつきの楽器がヤマモトコレクションにあったんです。」

H「それはすごいですね。この装置をつけると音はどうかわるんですか。」

S「今もいったように、本来ピアノの高音部は弦の数が少なくなるために、つまり一つの音に対して低音部は3本、中音部は2本、高音部は1本の弦がはってありますから、音が高くなればなるほど、響きは少なくなっていくわけです。アリコートという装置は、その響きがやせてしまっている高音部の響きを豊かにする効果があるわけです。」

H「ドビュッシーはフランスの作曲家ですから、もともとはフランスのピアノを使っていたんでしょうね。」

S「プレイエルですね。そして、このブリュートナーのピアノを手に入れたのが、1904年、2番目の夫人となるエンマ・バルダックとの「愛の逃避行」、つまりその時は彼らはそれぞれに別の人と結婚していましたから、ダブル不倫の旅行で、ジャージー島に旅行にいって、そこでこれを買ったといわれています。つまりこのころドビュッシーは新しい女性と新しいピアノを手に入れた。」

H「そして、新しい音楽も？」

S「そこなんです、問題は。たしかにこのころをさかいにして、彼のピアノ音楽はがらっとかわる。その前のいわばやや古典的な《ベルガマスク組曲》とか《ピアノのために》とかがあまりピアノの響きそのものをきかせるタイプの音楽ではなかったのに対して、その後は、《版画》であったり、《映像》であったり、いわゆる印象主義的といわれる、鍵盤全体の豊かな響きをきかせるタイプの音楽に変化するんです。」

H「もうこれはきまりですよね。」

S「ところがどっこい、そうともはっきりとは言えないんです。ドビュッシーは晩年にベヒシュタイン・ピアノを持っていたと言われているんですが、それだからといって、作品がなにか変わったということはないですよね。いや、あるかもしれないけれど、そのあいだの影響はよくわからない。」

H「ベートーヴェンなどだったら、ピアノのペダルの効果がものすごく変わっていたり、それこそ音の数が増加していたり、もっとはっきりと目に見えるかたちで、音楽の変化がピアノの違いで説明できますよね。」

S「ピアノの響きの変化というのは言葉にするのがむずかしい。ドビュッシーの作品の初演を多数手がけたリカルド・ビニェスというピアニストの証言や、ドビュッシーにピアノ演奏アドバイスを貰ったマルグリット・ロンなどの証言も参考にしながら、慎重に捜査を進めなければなりません。そして、もちろん、ドビュッシー本人の証言も。」

H「まるで推理小説ですね。」

S「まさしく、そのとおりで、音楽学、ひいては人文系諸学一般にいえるとおもうんですが、確かな証拠物件や証言を集めて、それらをもとに、いかに論理的に推論をつみかさねていくか、が重要で、これはまさしくシャーロック・ホームズ、エルキュール・ポワロ、エラリー・クィーン、明智小五郎……。」

H「あ、もういいですから……。」

S「あ、すいません、つい興奮して。」

H「今回は、重要な証拠物件としてアリコートつきブリュートナー・ピアノの現物というものがあるわけですね。そして、ドビュッシー、ビニェス、ロンなどの証言があり……」

S「さらには、当時のドビュッシーをめぐる状況証拠も視野にいれなければならないでしょうね。愛の逃避行だとか、それにちょうど畢生の大作《ペレアス》の初演が1901年で、それによって、なにかふっきれた感がありますよね。次の大作《海》が書かれつつあります。」

H「ドビュッシーって海が好きですよね。愛の逃避行の行き先も島だったし……」

S「そのころのピアノ曲の名曲に、ヴァトーの『シテール島（恋人たちの島）への船出』に霊感を得たといわれる《喜びの島》があります。これも野原さんに演奏してもらうつもりです。当時のドビュッシーの心境をよく象徴していますよね。ただ、調整されているとはいっても、100年前のピアノではなかなかアクションなどが思うようにならないので、野原さんは苦労なさっていましたが、山本さんの調整により、その問題も解決されつつあります。彼女の、そのような目に見えない苦心をのりこえた演奏も今回の「ききどころ」ですね。」

H「ドビュッシーの有名な言葉に「沈む夕陽をながめる方が《田園交響曲》を聴くよりもよい」というのがありますね。」

S「そして「音楽創造の秘密には、海のざわめき、葉ずえをわたる風、鳥の鳴き声がある」とも、ね。」

H「今日はありがとうございました。先生のご講演、野原先生のご演奏、とっても楽しみです。」

ブリュートナーで「響き」に覚醒？

講師の椎名亮輔さん（右）と演奏の野原みどりさん（中央）。奥のピアノが公演で用いるブリュートナー。
左は、修復を手掛けた山本宣夫さん（フォルテピアノ ヤマモトコレクション主宰）＝2014年12月10日、堺市

しいな・りょうすけ　1960年東京生まれ。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化博士課程単位取得満期退学。パリ第8大学音楽学部博士準備課程を経て、ニース大学文学部哲学科博士課程修了。哲学博士取得。東京大学助手、パリ第3大学講師、リール第3大学講師を経て、現在は同志社女子大学音楽学科教授。著書に『音楽的時間の変容』（現代思潮新社）、『狂気の西洋音楽史 ―シュレーバー症例から聞こえてくるもの』（岩波書店）、『デオダ・ド・セヴラック―南仏の風、郷愁の音画』（アルテス・パブリッシング、第21回吉田秀和賞受賞）。主要訳書に、マイケル・ナイマン『実験音楽』（水声社）、ドメル＝ディエニー『演奏家のための和声分析と演奏解釈』（シンフォニア）、ジャクリーヌ・コー『リュック・フェラーリとほとんど何もない』（現代思潮新社）などがある。

（＊）リュック・フェラーリ Luc Ferrari（1929～2005）フランスの現代音楽作曲家。椎名はフェラーリ夫人ブリュンヒルド女史の協力を得て、現在、彼についての書物出版を計画している。

ザ・フェニックスホールを設計した建築家　與謝野 久さん

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール設立20年に臨み、ホールに関連する様々な人々に聴くインタビュー。第2回は建築家、與謝野久さん。ザ・フェニックスホールと、ホールが入居する高層ビル（フェニックスタワー）の設計・監理を統括した設計会社で直接、設計に携わった一級建築士だ。フェニックス以前にも音楽ホールや美術館といった芸術施設、オフィスビル、議事堂などを手掛けてはいたが、この仕事は、なかなかの難事業だった。都心に立地するオフィスフロアの下層階に、完璧な静けさが必要な音楽堂をビルトインしなければならなかったためだ。與謝野さんはクライアントを軸とした知恵と技術と感性との緊密なチームワークでこれら二つの機能を統合。そればかりか、ホールの舞台背後の壁の外にガラススクリーンを設け、ヨーロッパの社交空間「サロン」に特徴的な親密性と、日本庭園の「借景」にも通じる開放性とを併せ持つ、独創的な音楽空間を創出した。　（取材・構成：あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール　谷本裕）

タワー建設にあたり、クライアントの損保が構想したのは、音楽ホールを内蔵するオフィスビル。ホールの基本コンセプトを、與謝野さんはどう受け止めたのだろうか。

――「すべての人に優しいホールをつくってください」。施主代表の岡崎さん（開設をリードした真雄館長＝当時・同和火災海上保険社長）から承ったのは、この言葉です。芸術文化施設を併せ持つオフィスビルは、設計を始めた1980年代終盤の大阪では珍しかった。建設地は阪急やJRの大規模駅を軸に集積するオフィス街・商業地区と文教地区の中之島、金融街・淀屋橋との結節点。気軽に立ち寄れる「オフィスと文化の複合体」として「垂直の街」を築く構想です。ビアホールや高層レストラン、ギャラリーも入る。中でもホールは、聴衆はもちろんアーティスト、公演の企画・制作に携わる人々にも心配り豊かな建造物であることを求められました。建築は、時と共に価値が高まっていかなければならない。清新な音楽体験と感銘を永く提供していける構造を仕込み、ホールが未来へ向けて生き通す道筋をつける。これが私たちの使命でした。

舞台後ろの壁をボタン操作で上げることが出来、そこに設けられたガラススクリーンを通し、都市の景観や季節の移ろいなどを屋内に採り込む。アイデアは、どこから？

――ハンガリーのアイゼンシュタットにある「ハイドンザール」を訪れた際、得た「ひらめき」が始まりです。「室内楽の父」ヨゼフ・ハイドンが仕えたエステルハージ家の、宮廷の大広間。今も時折、コンサートに使われています。壁面に大窓が幾つもあり、陽光が射し込む。柔らかな自然光の中、演奏を聴きました。日本のコンサートホールには、あれはなかなかありません。印象は鮮烈で、いつか自分も生かしたい、と機会を探っていました。

よさの ひさし　1946年大阪生まれ。71年早稲田大学大学院理工学研究科修了、同年に株式会社日建設計に入社。98年同社常務取締役大阪本社代表、2004年日建設計都市建築研究所長、同年国土交通大臣表彰、06年日本建築家協会理事副会長（4年）、11年神戸大学博士（工学）学位取得、同年に日建設計顧問退任。15年紺綬褒章受章。主な設計作品：いずみホール、ひろしま美術館、国際高等研究所、山口県庁舎議会議事堂、西宮市大谷記念美術館、住友化学筑波研究所、関電ビルディングほか。ザ・フェニックスホールでは、設計部長として設計を担当。兵庫県西宮市在住。

陽光を効果的に採り込むには、建物の方位や窓の位置が問題でしょう？

――設計担当になって考えたのは建物の「顔」、つまりタワーの「正面」をどの方角に据えるかでした。今、タワーは、梅田新道の交差点東南角の敷地に、45度の角度で北西を向いて立っている。「角地」の立地特性を最大限生かし、ハイドンザールのように自然光を室内に採り込める配置です。それと共に、タワー「正面」のホール階部分の外壁を全面ガラススクリーンにする提案をしました。表裏一体、ホール内ではそれが舞台背景になり、黄昏時以降は、特に自然光によって効果的演出が出来ます。聴衆は街のパノラマ、自然や空の景色と共に演奏を楽しめますし、街行く人々もそこで生演奏が奏でられていることを垣間見ることが出来る。内外の空間景観を双方が活用、視覚的にコミュニケーションできる特殊構造。私の目指した「開放系の形」です。

素晴らしい創意ですね。

――建築の「独創」の素は、我々の日々の営みの中に息づいているもの。建設地の個性をしっかりつかむことが大切です。実際に歩き、見て、歴史も調べ、土から本（地誌）を掘り出し、その地で事業を立ち上げた人々の思いを読みとれ。その試みの中に必ず、その地ならではの創造の種がある、と若手にいつも言っていました。こうしたホールをタワーに組み込むため、提案に到る過程では模擬実験を重ねました。オフィス階は効率的でアメニティ性を、ホール階は感覚的でメセナ性を、それぞれ重視します。異なる二つの機能や条件を一つの建物として統合し、安定性や強度を確保しなくてはなりません。各階の図面やパースを描き直し、模型でも確認を繰り返しました。昼間はもちろん、通勤電

「立地」生かした採光の妙

車で吊革につかまりながら、あるいは帰宅後に湯船の中で、時には枕元にペンライトやメモを置いてね。寝ても覚めても、夢の中でも、考え続けたのです。ホールに「自然光」を採り込むという創意を起点に、建物の「顔」を、同時にホール最大の特徴として位置付けて、機能や条件の統合を果たすことが出来たのは幸いでした。

とはいえ、室内楽ホールである以上、「音」をめぐって様々な技術的問題もあったことでしょう。

――視覚的に館の内外を繋いでも、聴覚的には騒音や雑音はシャットアウトしなければなりません。ガラススクリーンを二重構造にするなど、専門的ノウハウを活用し、遮音に努めましたが、実は他にも深刻な課題がありました。隣接する御堂筋や国道を走る車、地下を通る鉄道の騒音や振動です。地下鉄御堂筋線の振動対策で吸振用ゴムシートを地下に敷設したり、ホール自体をビルの中で「独立した箱」のような状態で設置する「浮き床」構造としたり。空調設備からの振動、冷暖房の送風導管での空気の摩擦音を封じるのも一仕事でした。ホールの天井や床、側面には千カ所以上、ゴムの緩衝材やベアリングを使っています。これら工法によって、理論上は防音・防振が可能。でも現実には工事の「質」が問題。一カ所でも不備があれば、静けさは損なわれる。設計者と工事施工者との緊密で高度な協働が不可欠でした。

このホールの主なコンテンツは室内楽。施設の形や客席の配置はどう決めたのですか。

――ホールに求められたのは、ヨーロッパの社交場「サロン」のような親密感。舞台の演奏家と客席の聴衆が、あるいは演奏家同士、聴衆同士が音楽を通じ意思疎通をし、一体になれる場づくりです。敷地の大きさや形から考えると、一般的な「シューボックス（靴箱のような直方体）」施設を造るのは難しい。制限を逆手にとって多角形のホールとし、1階は舞台を取り囲むようコの字型に椅子を配置する。2階にも馬蹄形のバルコニー席を設ける。舞台と各座席との距離は、最大でも10メートル程度しか離れておらず、お互いが表情や息遣いを読み取れる。とても贅沢で、同時に双方に和やかな〝真剣勝負〟を求める「コワイ舞台」かもしれません。

©SS大阪

タワーの外から見たザ・フェニックスホールの景観。ガラス越しに内部空間が伺える。傍らの支持柱にはヴェネズエラ出身、パリで活躍する彫刻家ヘスス＝ラファエロ・ソトのアート作品「北の幟（のぼり）」が取り付けられている。青・赤・緑・黒の金属棒を組み合わせたもので、同じ配色はホール内の廊下カーペットなどに施されている。「内外空間の連続性」が、ここにもデザインされている。

響きについてはどうでしょう。

――残響は長ければ良いという訳ではありません。例えば弦楽四重奏の場合、客席では演奏家4人の旋律線も全体のハーモニーも、バランス良く聴き取れなければならない。一方、演奏家は自ら発した音をすぐ点検・確認できる反射音が欲しい。そんな響きを求め、音響設計者と検討を重ねました。天井高を13メートルに設定し、十分な音場ボリュームを確保する一方、響きを微調整出来る傾斜パネルや吸音カーテンを備えてもいます。ある音響専門家はザ・フェニックスホールについて、音の発生場所を聴き取れる「音の清澄さ」、聴き手が響きに包まれたように感じる「豊穣感」が際立っている、と評価しています。音楽を楽しむ場としての真価が問われ出すのは、竣工後10年以上経過して後、とも言われています。ホールは単なるハードでなく、人々の生活を包む器。良い聴衆と良い演奏家、そして良い企画と運営が価値を高める。「すべての人に優しいホール」という創設の精神を受け継ぎ、誇り高い活動を永く続けていただきたいですね。

Greeting

日頃ホールを支えていただいている三本柱。演奏会の照明・音響を一手に受け持つホールの要【技術：田山周史さん(NHKメディアテクノロジー)】、ホールピアノの専属ドクター【調律師：中谷哲也さん(株式会社JEUGIA)】、笑顔の素敵な【レセプショニスト(株式会社ザ・アール)】の皆様からメッセージをいただきました。

技術：田山周史　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール20周年おめでとうございます。私は、2002年9月からホールの技術を担当させていただいて、なんと！13年目になります。どんなホールでも20年も歴史を積み上げると、各設備は耐久年数を過ぎ、舞台・照明・音響・映像等の設備がガタガタになってきます。ザ・フェニックスホールも例外ではありません。ホールご利用のお客様にご迷惑にならないよう、少しずつ設備更新をしています。が…私の頭も更新しないと近年のデジタル化している機器を使いこなせない現象が!!しかし、ザ・フェニックスホールには素晴らしいスタッフが揃っています。毎日のように意見を言い合い、殴り合いのけんかをし（冗談）、いかに良いコンサートをお客様に届ける事ができるか、日々精進しています。これからのザ・フェニックスホールの30年、40年をお楽しみに。きっと日本を代表する小さなホールになっていると思います。

調律師：中谷哲也　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール開館20周年、おめでとうございます。300余席の小ホールでバルコニー席を擁する、日本でも大変珍しい形状。客席も他のホールにはない臨場感に溢れ、初めて背面の遮光壁が開き、外が見えた時の驚きをよく覚えています。長年、フェニックスの本番に立ち会っておりますが、外が見えた時のお客さんのどよめきは、毎回新鮮で、また新たにフェニックスを体感していただけたと、ほくそ笑んでおります。ザ・フェニックスホールの響きは繊細で、ピアノ技術者には緻密にピアノを仕上げるテクニックが要求されます。ほんの少しでも甘さを残すと、ホールの響きの繊細さが仇となり不快な響きとなってお客様に届いてしまう。そんな緊張感のあるホールです。開館当時を知る唯一のスタッフとしては、これからもより多くのお客様にホールにお越しいただき、その響き・驚き・素晴らしさを実感・体感していただければ嬉しく思います。より一層のホールの発展をお祈り申し上げます。

レセプショニスト：株式会社ザ・アール

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール開館20周年おめでとうございます。20年前、「美人な人よりどこにでもいるような親しみある子がいいな。」と当時の支配人に言われ、採用した1期生は18名でした。現在レセプショニストは22名、中には10年以上お世話になっている者もいます。「心の美人」をモットーにこれからも微力ながらお手伝いをさせていただきたいと思っております。芸術を楽しみ、多くの方々と語らえる場所として、ザ・フェニックスホールが愛され続けることをお祈りしております。

Homage

コンサートホール徒然日記

神宮寺 昌宏

1965年、静岡県生まれ。国内はもとよりヨーロッパをはじめとした世界各地のコンサートホールを旅する。著書の『残・響～Selection・音楽ホール演奏側と鑑賞側』を電子書籍で出版。これまでにクラシック音楽専門誌、コンサートホール情報誌やフリーペーパーにてコンサートホールの記事を執筆。
H.P http://www.zankyo.com

1991年頃から、私は響きの違いに興味を惹かれ、東京を中心に首都圏のコンサートホール(以下「ホール」)に脚を運ぶようになった。やがて、全国各地のホールに出向くようになり、響きと共にホールの置かれている立地やコンサートの雰囲気に嗜好が広がっていった。そして、2008年のウィーンをきっかけにヨーロッパへとフィールドを拡大。これまでに海外を含め200くらいのホール(文化会館などの多目的ホールを含む)を訪れたのではないかと思う。その中で、印象に残ったホールを3つ紹介したい。

一つめは、東京の赤坂にあるサントリーホール。今さら日本を代表するクラシック音楽専用ホールについて、改めて述べることもないのだが、2010年10月13日、ヴェルディのレクイエムのコンサートに訪れた時のことであった。この日、私は他の予定もあり半ばあきらめながらホールの入口に到着したのが20時25分。既に全7曲のうちの最後の曲がスタートした後であった。コンサートやプログラムによっては曲が始まった場合、ステージと客席の雰囲気を壊さないよう途中入場を認められないこともある。

ところが、ホール正面玄関に立った途端まず驚いたのは、視界に入るサントリーホールのスタッフと会場案内係(レセプショニスト)全員が、開演時と同じ状態で入口を向いて立っていたことであった。このタイミングでは、終演間近で、これから訪れる聴衆などいない可能性も高く、後片づけの準備をしていてもおかしくはない。実際に他のホールで同じような時間に到着した際、主催者やスタッフが後片づけの作業をしており「やっぱりこんな時間に来るべきではなかったな。」とテンションが下がってしまった思い出もあった。

「この人たちは、開演から最後の曲が終わるその時までこの姿勢でいるのだろうか」。その瞬間、出迎えてもらっているという喜びでテンションが上がったことを覚えている。さらに正面にいたサントリーホールのスタッフが、レセプショニストに対し「チケットもぎりは後でよいから、この方をご案内して。時間がない。」と素早く機転を利かせてくれ、レセプショニストが曲間の切れ目で客席後方席に案内してくれたのである。

コンサート自体は、ほんの少ししか聴くことができなかったが、こういったスタッフの対応とレセプショニストの姿勢は、聴衆に好印象を与え、ひいてはホールのイメージアップにつながる。後日このスタッフに改めてお礼をいったところ「皆様に気分よくお越しいただき聴いていただくよう努めています。」とのことであった。

二つめは、同じく東京大田区にある大田区民ホール(通称:アプリコ)。首都圏以外にお住まいの方にとっては、地理的な位置関係が不案内かと思うが、東京の西側で神奈川との県境。23区内にあり羽田空港も近い。ホールは最寄りのJR蒲田駅から徒歩3分だが、山手線の外ということでなかなか脚を運びづらい。貸館で利用する場合には使用料が手ごろで利用しやすいが、ホールの主催事業では、スタッフは集客に頭を悩ませるところである。

このホールの管理を行っているのは公益財団法人大田区文化振興協会であるが、開館10年にあたる2009年度に「クラシックコンサート・モニター」を募集した。この財団もそれまでは多くのホール(管理運営者)が実施しているように来場者アンケートを行っていたが、「クラシックコンサートの鑑賞を広く普及促進させるため」にアンケートよりも直接聴衆の意見を聞いて主催事業や管理運営に活かそうと試みたのである。一般公募と財団推薦の計15名に1年間の間に指定された数公演を聴いてもらい、毎回アンケートの提出を求め、3回の意見交換会により集約を図るものであった。私は、財団推薦により2年間モニターを務めたのだが、コンサートそのものの感想ではなく、企画の是非、内容の是非、入場料の高い低いなどを問う形式で、意見交換会においては活発な意見が取り交わされていた。ここでは、具体の内容は省略するが、この制度は財団側にとってみれば「自ら選んだモニターに言いたいことを言われてしまう。」可能性も大いにある。しかし、形式的にアンケートをとるだけでなく「虎穴に入らずんば虎児を得ず」に挑んだ姿勢は画期的でもあり勇気のいる決断であったかと思う。その後、このモニター制度は予定の3年間を実施し、さらにクラシックに特定しない形で継続されたが、公立ホールにおいて住民と対話をしながらコンサートホールのあり方を考えてゆくよい試みである。

最後は、海外から。イタリアのミラノの郊外にあるTEATRO degli ARCIMBOLDI(アルティンボルディ劇場)。ここは、2010年9月に訪れたが、このホールの特徴は、開演の合図が壁に設置された多数の電球の点滅によることである。日本の場合、ブザー、鐘、鈴あるいはお手洗いでは、スタッフによる直接の呼びかけなど総じて聴覚によるものが多い。このことについて私は、何の疑問も持たず当たり前のことかと特に気に留めたこともなかった。コンサートというのは、基本的に聴覚で楽しむものであるから実際はこれでよいと思うのだが、瞬間的に確実に伝えられるという点では、視覚に訴える方が効果的かもしれない。むろん電球の点滅だけにしたら、今度は目の不自由な方にはどう知らせるのかという問題が起きる。しかし、どうすることがより聴衆に効果的に伝えることができるのかということを考えさせられた日であった。

コンサートホールの建設ラッシュから30年近くが経過し、建物の維持管理の局面に差しかかる中、ソフト面のサービスの充実が問われる年頃となってきた。ホールの音とともに心温まる瞬間に出合えることをこれからも期待したい。　(じんぐうじ・まさひろ=コンサートホール・ジャーナリスト)

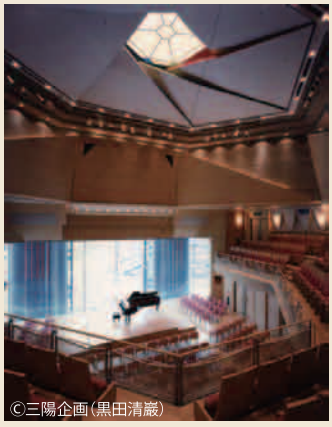
Gallery

『翼』

当ホールには、10の客席扉があります。
1枚の扉でロビーの話し声や雑音を遮断し、ホール内の静寂を保つため、大変重厚に作られています。今回は、この扉の「取っ手」にスポットをあてます。
取っ手は少し不思議な形をしています。(写真①)ホール設計を手掛けた與謝野久氏(7-8ページ参照)によりますと、この形は、実はホール名にうたわれている伝説上の不死鳥・フェニックスの翼をかたどっているそうです。ホールには、壁や天井面にも、三角形のモチーフが随所にあります。(写真②)これらもフェニックスの翼をイメージしたものです。
この取っ手、見え方は「ハート型」「蝶々の羽」「そら豆」と人によって様々で、想像が膨らみます。皆様には何に見えますでしょうか?
開演前、唯一閉まっている舞台に向かって左側の出演者専用扉を、一度じっくりご覧ください。

写真①

写真②



©三陽企画(黒田清巌)

Venues for Chamber Music

室内楽ホールを巡るシリーズ第2回。
大人向けの、充実したプログラムで知られる東京の王子ホールとトッパンホールを紹介する。

王子ホール

設置者：王子製紙株式会社（現・王子ホールディングス株式会社）
所在地：東京都中央区銀座4-7-5
電話：03-3564-0200　座席数：315席

こんにちは！室内楽ホール
❷東京編

エマニュエル・パユ（Fl）、ジャン＝ギアン・ケラス（Vc）、イザベル・ファウスト（Vn）、クリスティアン・ゲルハーヘル（Br）といった著名演奏家公演のほか、平日午後、買い物ついでに友人と気軽に楽しむ「銀座ぶらっとコンサート」、気鋭作家と演奏家が協働する「ギンザ・ブックカフェ・コンサート」、ライブハウス感覚の「G-Lounge」など。

東京生まれ。幼稚園、小学校時代を札幌で育つ。東京女子大学短期学部教養学科卒業。株式会社ジャルパック宣伝部を経て、1993年11月、王子ホール入社。広報、宣伝、営業の各部を経て、2002年よりチーフ・プロデューサーを務める。08年6月、株式会社王子ホール取締役となり、14年4月、同代表取締役社長に就任。

銀座の街と「連動」の舞台　チーフ・プロデューサー 星野桃子さん

幼少時札幌で育つ。その頃から教会で聴く讃美歌が好きでした。父は放送局に勤め、よく夜中に同僚を連れて来ては酒盛りした。中にドイツ歌曲を歌う方が居られ、伴奏した母が私のピアノの先生。大の舞台好きで、東京に戻ってからもコンサートはもちろん歌舞伎やタカラヅカなど演劇にも連れて行ってくれた。

学校を出、就職したのはジャルパック。海外の旅行を企画し販売する会社で、15年間、働きました。担当は宣伝。バブルの頃は「本当の遊びを知る」のも仕事で、本当に楽しかったですが、30歳代半ば、どうしても音楽ホールのプロデューサーになりたくて退職。公募でここに来ました。

広報や宣伝、貸し館営業などの仕事に携わり、企画のチーフになったのは2002年。入社から10年経っていました。席数315。ヨーロッパが薫る、サロン風の空間が好きです。ホール所在地の銀座は、東京一オシャレな街。お客様にはそれも舞台で、コンサートをつくる時は、街との「連動」を意識します。

顧客のイメージは「成熟した大人」。ロビーでお客様の好み・嗜みをそれとなく読み取ろうとしますし、街に出、路地裏を覗いたり、喫茶店で会話に耳を澄ましたり。旅行会社で培った「女性の視点」を仕事に活かしていると思います。また銀座は店の入れ替わりが激しい。そんな中、老舗の仕事を見るのも勉強です。

看板事業の一つが「MAROワールド」。「まろさん」ことN響コンサートマスター篠崎史紀さんにホスト役になってもらい、毎回、テーマの作曲家に関わる演奏や語りをお願いしています。若手を起用しながら、アイデアを持ち寄って手作りする。聴きに来られた方々にホノボノとした気持ちになってお帰り頂き、親子代々、聴き継がれる。そんなコンサートが理想です。

長くプロデューサーと支配人を兼ねてきて昨年からは運営会社（株式会社王子ホール）社長になりました。プロデュースと経営。二つの仕事は普通、別人が受け持つ。成功したら、新しいビジネスモデルになるかもしれません。大切なのはバランス感覚。好奇心が続く限り、挑戦を続けていきたいですね。

トッパンホール

設置者：凸版印刷株式会社
所在地：東京都文京区水道1-3-3
電話：03-5840-2200　座席数408席

こんにちは！室内楽ホール
❷東京編

ハーゲン・クァルテットやシュタイアーのほか、ジュリアーノ・カルミニョーラ（Vn）やティル・フェルナー（Pf）の連続公演をはじめ、国内実力派による「大人の直球勝負」、若手演奏家とホールの共同企画で3年3回の公演を開く「エスポワール」、歌曲を継続的に取り上げる「歌曲（リート）の森」、アジアの才能を発掘・紹介する「アジアの感性」など。

上智大学卒業後、ワコールに入社、東京・青山のスパイラルホールの立ち上げに参画。以来、演劇、ダンス、ファッション、音楽など様々な形でアートと表現に関わる。2001年より現職。その傍ら、東京藝大、早稲田大学、洗足学園大学などで芸術と社会との関係を教える。東京都芸術文化評議会専門委員。

「高み」目指す独自の公演　企画制作部長 西巻正史さん

開館は2000年秋。私は翌01年春から仕事をしています。室内楽ホールとしては紀尾井や王子、浜離宮朝日が既に在り、後発組。立地でも近隣のどの駅からも徒歩10分前後とやや遠く、ハンディとされていた。他館と似た事業では、東京の音楽シーンの中で埋もれてしまう。親密な雰囲気と優れた響きを活かし、「ここでしか聴けない公演」をラインナップすることにしました。

主催公演の主軸に選んできたのはベルリンフィルの元コンサートマスター、ライナー・クスマウル（Vn）やハーゲン・クァルテット、故・園田高弘（Pf）、アンドレアス・シュタイアー（フォルテピアノ）ら、明確な自我と個性を持つ室内楽の名手ばかり。選曲はかなりの部分、こちらで決めます。未開拓のレパートリー、演奏家自身は気付いてない特性に合う曲で、彼らが「本気」になるプログラムを提案します。本人や所属事務所の「志向」と異なり、協議していた公演を中止・延期することもあります。

私はリハーサルをとても重視します。ホールの響きを感得してもらうためです。例えば若手発掘のための「ランチタイムコンサート」。公演時間こそ30分と短めですが、本番半年前からリハーサルを始め、3、4日間を費やすことも。主催公演を優先する運営ならではの特徴です。

私はこのホールを「大人の遊び場」と位置付けています。聴衆の「核」には、ある程度の社会的地位にいて生活の余裕や教養がある「趣味人」を想定しています。彼らなら、深く込み入った内容も理解してくれる。バブルの頃は、こうした人々が確かに居た。でもその後、コンサートが均一化し、姿を消してしまった。彼らが戻って来る「場」を目指してきました。

クラシック業界では近年、聴衆増を狙い「垣根を下げる」試みが目立つ。でも今の世の中、面白いことは幾らでもある。直球勝負で「スゴイ」と思わせないとダメ。私は逆に意図的に「高み」を目指してきた。頂点を高くする営みは、裾野を広げる作業と共に不可欠。最近は地理的ハンディを超え「クラシック界の隠れ家レストラン」と呼ばれるようになりました。

自分を映す鏡、声と役

—石橋栄実

「今後演じてみたい役は？」と質問をいただくことがよくあります。次に出会える作品は何だろう！というウキウキは常にありますし、いつか歌ってみたいなぁ…とぼんやり憧れる役もいくつもあるのですが、既に経験した役への思いと比べると、公言するレベルには届かず、「えーっと…」となんとも歯切れの悪い返答をしてしまいます。

一方、「これまでで心に残っている役は？」という質問には困りません。もちろん出会った役は全て本当に大切で、それぞれに思い出深いのですが、パッと頭に浮かぶのは「フィガロの結婚」のスザンナと「沈黙」のオハルです。この二役は他よりも演じる機会に多く恵まれたため、きっと、より強い友情を感じているのかもしれません。

特に、オハルの舞台経験は、今年6月の新国立劇場公演で10回を数えました。初めてこの役に出会ったのが2003年なので、12年間で10回。ミュージカルなどロングラン公演がなされているジャンルもあるので、「たったの10回？」と思われる方もおられるかもしれませんが、オペラの世界、特に関西のオペラ界においては、二日公演ダブルキャスト（つまり出演は一回）の場合も多く、10回同じ役で舞台に乗れるというのは本当に幸せなことなのです。

言うまでもなく、オペラにはストーリーがあります。物語の中でどう生きるか、その役が何を思い、何を伝えるために存在しているのか、わたしたち歌い手は、演出家のプランを仰ぎながら、とことん考えます。キャラクターが自分とは正反対の場合もあれば、似過ぎていて区別するのが難しいときもありますが、音楽からヒントを得ながら少しずつ役に近付いていく作業は本当に楽しいものです。そして、仲間と汗を流した稽古の先に迎えた本番では、役との間に、本番でしか得ることの出来ない絆が生まれます（そんな気がします。片思いかもしれないけれど！笑）。こうして、回数を重ねれば重ねるほど、思い入れが強くなっていくのです。

オペラの場合、役は、声のキャラクターで決まります。歌いたい役＝歌える役、とは限りません。歌手はまず、自分の声の特性を知り、楽器の健康を守るためにも、合う役を見極められるようになることが重要です。また、もし、きちんと自分の声を理解した上で歌いたいと熱望する役があったとしても、残念ながら歌手には演目を選ぶ権利はありません。自主公演なら話は別ですが、たいていの場合、どこかのプロダクションがその演目を選び、自分にオファーをくださらなければ（もしくはオーディションに合格しなければ）叶わないこと。そう思うと、役との出会いも再会も奇跡のように感じます。

声は他の楽器と違い「未完成の楽器」です。プロの職人によって作られた完成品ではなく、奏者自らが、演奏技術の向上を目指すと共に楽器そのものを育てていかなければなりません。楽器が体に内蔵！されてしまっているので、つまり体調＝楽器の調子。本番前に風邪でも引こうものなら悲劇です。つまり咳き込むピアニストが、高熱でふらふらのピアノを弾くようなもの（笑）ああ、想像するだけで恐怖…。

体、心、年齢、経験、環境…奏者を取り巻く様々な状況が演奏内容に直結する声という楽器。逆に、自分では気付かないでいても、演奏の状態から心身のコンディションを知ることもあります。変化し続ける楽器だからこそ、役と再会したときには、前回苦戦したことに楽に対応できるようになっていたりして、褒めてもらえたような気持ちになることもあります。これは再会でしか知り得ないご褒美です。

声や役を通して自分を知る…まさに自身を映す鏡。この世にたった一つの特別な楽器をいつもしっかりと見つめて、その時その時の身の丈に合った演奏を目指し続けたいと強く思います。

石橋栄実(いしばし・えみ)／ソプラノ歌手

大阪音楽大学専攻科修了。咲くやこの花賞、大阪舞台芸術奨励賞、音楽クリティッククラブ奨励賞、坂井時忠音楽賞、ほかを受賞。1998年、ドイツ・ケムニッツ歌劇場「ヘンゼルとグレーテル」グレーテル役で招聘出演。それ以来、オペラの舞台に多数出演。2015年は、大阪国際フェスティバル「ランスへの旅」(アルベルト・ゼッダ指揮)でコルテーゼ、新国立劇場「沈黙」でオハルを好演した。次回の出演は大阪音楽大学創立100周年記念特別オペラ「ファルスタッフ」のナンネッタ（ザ・カレッジ・オペラハウス10/30,11/1）。大阪音楽大学准教授。

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー5F　TEL 06-6363-0211

Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月　2015年9月
発　　行　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
編　　集　吉元 晃
デザイン　松井桂三有限会社